英文のお手紙

永代美和代

萬壽代さんが學校から歸つて來ますと、小間使ひのすえは、お歸り遊ばせの御挨拶もしない先きに、いきなり斯うはづんだ調子で云ひかけました。

「アノお嬢様、あなた様へあのう、亞米利加からお手紙でございますよ。」

「亞米利加から私へ？」

萬壽代さんは内々誰からのお手紙だらうと考へながら、一寸と思ひ掛けないと云つた様子で訊き返しました。

「ハイ亞米利加からあなた様へ、アノ先刻奥様が消印を御覽になつてゐらつしやいましたが、何でもアノサンチャゴとか申す處かららしいさうで御座いますよ。」

「アッ解つた三ちやんからだ！」

萬壽代さんはヤッと思ひ當つたのが嬉しくて、思はず大きな聲を擧げました。

「いゝえお嬢様、サンチャンでは御座いません、亞米利加のサンチャゴの消印ださうで御座います」

「アラ嫌なすえだよ、だから私、サンチャゴから三ちやんがお寄越しなすつたんだつて、さう云つたんだわ」

萬壽代さんは急いで茶の間へ行きました。三ちやんと云ふのは萬壽代さんのすぐ上の兄さんで、去年横濱を出航した高等學校の練習艦、大成丸に乘り込んで外國を廻つてゐるのです、非常に元氣の好い、如何にも未來の船將にふさわしい、快活な青年ですが妹の萬壽代さんとは、兄弟中でも一番の仲よしなのです。萬壽代さんが母様や兄様達のお眞似をして、わざと、三ちやんと呼びかけますと、三兄さんは大抵氣輕に、オイオイと返事をします、ですが、餘り立て續けに云つてると、

「オイよせや、兄貴だぞ」

とさう云つて、一寸と白い眼をひいて見せますのそして南米サンチャゴがその航路になつてゐる事は萬壽代さんもよく承知して居るのでした。

「姉様只今、アノ私のお手紙何處にあつて？」

萬壽代さんはケープを脱ぐ間もせかくしながら、辛と姉様の前へ座ると直ぐ斯うお尋ねしました。

「オヤお歸んなさいハイカラなお手紙が來てますよ、ソラね、その針臺の上に」

「アラ！」

萬壽代さんは淡紅色の思ひ切つて小形な狀袋を

取り上げて、華奢な横文字で認められた自分の宛名をじつと見入つてゐましたが、

「これ三兄様の字ぢや無いわ、ねえ姉様違つてますてせう？」

と姉様の御意見を訊きました。

「さうね、さう云へば些少違ふやうにも見えるけども、だつてあなたサンチャゴから來たんですもの、屹度三ちやんに相違ないわ。」

「さうかしら、兎に角切つて見ませうね。」

中を見たら解る事だと思つて、萬壽代さんが急いで封を切りますと、封筒と同じ淡紅色の紙に書かれたのは、まア、思ひ掛けもない英文なのです。

「アラ、アラ英文よ、どうしたんでせうね。」

「三ちやんが屹度酒落れてお寄越しなすつたのよ。」

「だつて三兄様は私が英語のよめないのを、よく知つてる筈ですものね、屹度私三兄様ぢやない、他の人から來たんだと思つてよ。」

「ナニ、三ちやんの酒落書ですつたら。」

「そいだつて、そいだつて何だか變よ。」

云ひながら手早く紙を展げる拍子に、パタリと落散つたものがある、見るとそれは名刺形の、若い、綺麗な西洋人の女の寫眞です。

「それ御覽なさいよ姉様、三ちやんからぢやないわ」

「さうね、不思議ねえ、兎に角讀んで御覽なさいよ。」

「だつて私讀めないんですもの。」

「女學校で英語を習つてる癖に何ですねえ。」

「だつて手紙なんて、私まだ、とても讀めないんですもの。」

「併し、少し位解るてせう。」

「えゝ。」

「そんなら讀んで御覽なさいな、勉强にもなるわ、そして解らない處を純兄様から敎はれば可いてせう今日は少し遲くなるかも知れないけども、夜は歸つてらつしやる筈ですから。」

「そいぢや私讀んで見るわ。」

萬壽代さんは胸をドキツカせながら、なるて試驗

でもされてるやうな氣持ちて、一生懸命讀みにかゝりました。だつて純兄様は英語學者で、專門學校の先生なのですもの、餘り間違つた讀み方をして居て、後から笑はれると恥かしいわ。

併し幾ら一生懸命になつても、萬壽代さんはまだ幸と女學校の一年生です、亞米利加人の書いた手紙なんぞ、どうして完全に讀めるもんぢやありません。」

「解らないわ私……。」

萬壽代さんは困つた顏をして塀う云ひながら、お部屋から辭書を持つて來たりしましたが一字一字難かしい文字を引き出したばかりては、勿論章句の意味を知る事は出來ません。

「何と書いてあつて？ 些少も解らないの？」

「えゝ、そいでもね、私はあなたのお寫眞を見ましたと書いてあるわ。」

「それから」

「あなたの兄様に逢ひましたー——だからね姉様、矢張り三兄様に逢た方からよ。」

「そうらしいのね。」

「アラ、お聞きなさいよ、こんな事が書いてあつてよ。」

萬壽代さんは笑ひながら讀み上げました。

私は髪の毛の赤い、肌の白い、眼玉の色の碧い亞米利加の少女で、今年十九になりました――

「ホホホ面白いのね。」

姉様も笑つて、もつとその後を聞き度さうにして被在います。だが、萬壽代さんは急に行きつまつて了つて、

「解らないわ私、ねえ姉様、北處にね、リー將軍と云ふ字とね、南北戰爭と云ふ字とね、それから伯父と云ふ字とね、名譽と云ふ字がありますの、だけども章句が難しいんですもの、何の事だか解らないわ。」

「そいぢやその方はリー將軍の姪なのかも知れませんよ。」

「アラ、タイセイ丸つて字もありますわ。」

「兎に角面白いぢやありませんか、異人の女からお手紙を貰つたりして、萬壽代さんは餘程ハイカラね。」

「アラ酷いわハイカラだなんて、皆な三兄さんのせいぢやありませんか。」

萬壽代さんは姉様を一寸と睨んで申しましたが、心の中の内々では、もう〳〵嬉れしくつて堪りませんでした。

「何て名前の方かしら、ね姉様、メリーてせうか、エレナてせうか、私もつとハイカラな名前だと好いと思つてよ。」

「ホホホホソラね、矢張りあなたはハイカラよ。」

「知らないわもう。」

こんな事を云つてるうちに夜になつて、純兄様がお歸りになりました。早速例のお手紙を出して讀ゑで頂きますと、斯う書いてありました。

親愛なる萬壽代子様御許に

突然妙な手紙をお受取り遊ばしたあなたは定めしお驚ろきなさいませう、どうぞ失禮の段お免し下さいまし、私はあなたのお寫眞を拜見致しましたあなたの兄様にお目にかゝつて、色々お話を伺ひまして、もう〳〵お懐しくつて、私はあなたを好きで堪らなくなりましたの。

あなたはまだ女學校の二年生で、斯う申しては失禮ですけれど、まだ完全に英文をお讀めにならないさうです。それだのに勝手に英文の手紙を差上げたりして、ほんとに濟みません、併しあなたの兄様のお話では、あなたにはもう一人お兄様があつて、あなたのために、お解りにならない處は讀んで下さるさうですし、それからまた、若しあなたがお願ひなさいますなら、私への返事も書いて下さると云ふ事でしたから、私はお懐しい餘りに、ぶしつけな態度をとりました、どうぞ堪忍して下さいねえ。私は封入の寫眞で御覽なさいます通り、髪の毛の赤い、肌の白い、眼玉の色の碧い亞米利加の少女で、今年十九になりました。アノ南北戰爭の際に名高かつた名譽のリー將軍は私の伯父に當りますそれで私も矢張り姓をリーと名乘つて、名前はルイズと申します。ですが私にはもう父が御座いません。母と二人さりて淋しく暮して居りますの。私は幼い時から海が好きで、お船が好きで、そして日本が大好きで御座います、あなたの兄様とお友達になりまして、大成丸へ遊びに出掛けるのがどんなに愉快で、どんなに面白いか、そしてあなたのお話を伺ふのが、どんなに樂みか、私は嬉しくつて堪りません。是非日本に遊び度い――これは私の年來の望みです、ですけれど、親一人子一人で、私のためには大事の〳〵母が、どうしたものか海が嫌で、お船が嫌で、そして日本が大好きなのでございますもの、母は私一人を手離してお國へやつては呉れますまい。二人共日本が大好きな癖にして、一生日本へ行つて、お懐しいあなたと逢ふ事も出來ないかと思ふと殘念で、悲しくつて堪りません。ですけれど、せめてお手紙を頂戴な、お手紙で二人が仲よしになつたなら、どんなにうれしい事でせう。まだ見ぬ亞米利加の少女萬壽代さんは今度だけは兄様にお願ひすると、この次さの手紙は屹度自分で書き度いものだと云つて、急に英語を勉强し初めました。